高山の文化を高めた人々 52

「素直な目と素直な心」で高山を見続けた 稲越　功一

横山　明男

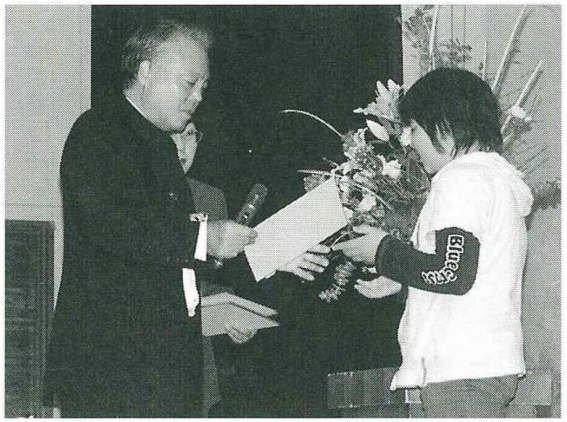
「高山のよさは、山や河がとってもきれいで、みんな優しい目をしているということを、審査の時に稲越先生の話を聞いて、改めて感じました。」これは、平成十七年に北小学校が稲越功一氏を審査員として招き、今年で七回目を迎えた「私の好きな高山」写真コンテストの時の子どもの思いです。

五・六年の子どもたちは、全員が毎年夏休みに各自一台のインスタントカメラを持って自分の感じた高山にレンズを向けシャッターを押します。その中から「とっておきの一枚」を選んで出品します。審査時の功一氏の言葉は、子どもたちの心にぐいぐい浸透していきます。「素直な心と、素直な目でシャッターを押すんだよ。」とやさしく子どもたちに語りかけていました。

北小学校と功一氏との出会いは、県の「能力開花事業」の講師に登録されていた、高山市出身で一流プロ写真家の功一氏を審査員として招くというものであり、それが「私の好きな高山」だったのです。功一氏の持つ「自然や人のぬくもり、ふるさとへの熱き思い」を教育に生かしたいという願いからスタートした写真展でした。

夫人とともに

しかし、第五回を終えた年明けの平成二十一年二月、残念ながら功一氏は、六十八歳の若さで肺ガンのために他界してしまいます。その後も、夫人の敬（きょう）さんを招き、敬さんを中心とした実行委員の森瀬一幸元高山市教育長、谷口茂雄元北小学校長等が引き続き審査講評する形で本年度も実施されました。そして、今後も継続して実施していく予定となっています。


コンテスト表彰式にて

功一氏の高山の自然や人を愛した気持ちをいつまでも忘れないように、平成二十二年四月、北小学校の玄関前の通称「のぐるみ池」の中州に、功一氏の愛した「素直な心と素直な目」という言葉を刻んだ石碑を設置しました。次の年の春には、北小美術館開設に併せて写真コンテストの作品展示特設コーナーも新たに開設しました。

さて、ご存じの方も多いかと思いますが、ここで少し稲越功一氏の経歴を簡単に紹介しておきます。

＊

昭和十六年高山市に生まれ、青年期に東京に出る。昭和四十五年にフリーランスカメラマンとして活動を開始し、昭和五十五年には講談社文化賞を受賞。精力的に写真撮影を続ける中で、国内外にて多くの作品集を出版すると共に、様々な展覧会を次々に開催。最近では、平成十九年「写真集　新シルクロード」を出版し、銀座にて同展覧会を開催。平成二十年「まだ見ぬ中国」書籍出版と併せて、銀座にて同展覧会を開催。

また、平成十八年の高山市制施行七十周年記念誌「たまゆら」の写真を担当。あとがきに「飛騨人の透明さ」と題して文を寄せる。その結びに「-略-私は高山に生まれたことにますます自信を持つ今日この頃である。」と書き綴っている。

＊

このように、作品集や展覧会等を通し国内・海外にて活躍された功一氏ですが、その軸足はしっかりと「ふるさと高山」に根付いていたことを改めて強く感じさせられます。

だからこそ、功一氏は子どもたちとの「私の好きな高山」を通したふれあいをとても大切に、そしてとても楽しみにしていたのです。「素直な心と素直な目」、この功一氏の志は、写真コンテストと共に、いつまでも北小学校の子どもたちと多くの市民の心と目に生き続けていくと確信しています。